

生活のための工業技術

将来の革命において、工業技術の最緊急の仕事は最小限の労苦ではん^り溢する程の物品を生産することであるだろう。この仕事の直接的目的は社会的領域を革命的な人民に永続的に開放すること、つまり革命を永続的にすることであるだろう。これまでの社会革命は、警鐘のとどろきが仕事場のがんがながちやがちやいう騒音を超えて人民に聞き取られることがなかったが故に、崩れ去ってきた。自由と豊富の夢は生存の手段を生産するという浮世の無味乾燥な義務によって汚された。歴史の狂暴な事実を回顧すれば、我々は、革命が人民にとって絶えざる犠牲と節制を意味した限り、権力の手網は政治的「専門家」、すなわちテルミドールの凡人達の手に握られた、ということが解る。国民公会のリベラルなジロンド党員がいかによくこの現実を理解したかは、パリの住人の大衆集会の革命的情熱——一七九三年の大部分——を、集会は「夜の十時に」、あるいはカーライルが我々に語るように、「仕事をする人々が彼等の職場から帰る前に」（「フランス革命」）閉会されねばならない、と布告することによって、減殺させる努力をしたことによって判断され得る。布告は効果が無いと解った、がしかしそれはうまく着眼されていた。基本的に、過去の革命の悲劇は、早かれ遅かれ革命のドアは「夜の十時に」閉じた、ということであった。現代工業技術のもっとも批判的な機能は、革命のドアを永続的に開いたままにしておくことであらねばならない。

ほぼ半世紀前、社会民主主義と共産主義の理論家達が「すべての

人々の労働」の社会についてべちやくちやべつている一方、ダイスト、つまりあのすばらしい狂人達はあらゆる人々の不労働を要求した。数十年間は、この要求の意義を少しも減じてこなかった、そしてその内容を増加した。労苦がもっとも正味の可能な最小限にまで減少せられる、あるいは完全に消滅する瞬間から、生存の問題は生活の問題になり、工業技術それ自身は、人間の直接的な必要の従僕であることから人間の創造性のパートナーであることになる。

この事を委しく観てみよう。多くの事が「人間の延長」としての工業技術について書かれてきた。もしそれが全体としての工業技術に適用されることを意味するならば、その語句は人を誤らせるものである。それは主に伝統的手工業の仕事場に対して、そして多分機械発展の初期の段階に対して妥当性を持つ。手工業職人は彼の道具を支配する。彼の労働力、芸術的性向、そして個性等は生産過程における至上の要素である。労働力は単なるエネルギーの消費ではない。その活動が人間の使用のために生産物を準備し、それを形造り、そして最後に、それを装飾することに感覚的に方向づけられている人間の人格的な仕事でもある。手工業職人が道具を使い動かすのであって、道具が職人をそうするのではない。たとえばどんな疎外が職人と彼の生産物の間に存在しようとも、フリードリッヒ・ウィルヘルムゼンが強調したように、「芸術家的判断」作られるべき物に影響する判断」（「工業技術の失敗」）によって直接的に克服される。道具は職人の力を人間的なものとして増強する。それは職人の芸術家的手腕を発揮させるために、原料に対する創造的生命体としての彼の独自性を授けるために、職人の力を増強する。

機械の発達 は人間と生産手段の間の親密な関係を決裂させる傾向

がある。それは労働者をあらかじめセッされた工業の仕事、つまり彼が何らのコントロールも働かせないところの仕事に同化する。

機械は今やよそよそしい力—生存手段の生産から離れ、かつそれでもなお結合した力—として現われている。初めは「人間の延長」であつたけれども、工業技術は人間を超える力に変えられ、その活力を産業的官僚制によって企図された楽譜にしたがつて管弦楽に作曲している（「官僚制によって統御されている」）。繰り返すが、人間ではなく官僚制、つまり社会的機械、生産の支配的な様式としての大量生産の到来とともに、人間は機械の延長となった、そして生産過程における機械装置の延長のみならず、社会過程における社会的装置の延長にもなった。人間が機械の延長になる時、人間は自分自身のために存在することを止める。社会は粗悪な訓言によって支配される—「生産のための生産」。職人から労働者への、活動的な個性から益々受動的な個性への減衰は、消費者としての人間—彼の趣味、価値観、思想、そして感受性等が、「シンク・タンク」における官僚「チーム」によって工作される経済的実在—によって完成される。機械によって標準化された人間は機械にまで堕しめられる。

人間機械が官僚的理想である^(注)。それは間断なく生活の新生、青年の再出現、そして官僚制を乱すところの矛盾等によって公然と反抗される理想である。新世代毎に再度同化されねばならない、そしてそのごとに爆発的抵抗が伴う。官僚制は、今度は、決してそれ自身の技術的理想に従つて行動しない。凡俗人達で混雑して、官僚制はしきりと錯誤する。その判断は新しい情況に追い越される。馬鹿げた事にも、官僚制は社会的不活動に苦しめられ、常に偶然によって打ちのめされる。社会的機械に開いているわずかな裂目が、生活の

神経系のように独力で働き、我々自身の体が度々の病気の発作時に必要とする救済に当るだろう。人間を機械から分離する裂目は埋められないだろう。それは単純に無視されるだろう。

工業技術を無視することは、勿論、いかなる解決でもない。人間は生命力にあふれた人間経験—生産活動の刺激、機械の刺激—を打切ることになるだろう。そうではなく、工業技術は人間の個性の形成に力強い役割を演じることができる。ルイス・マンフォードが論じてきたように、あらゆる芸術はその技術的側面を持ち、自発性の自己動員が表現された秩序になることを要求し、経験のもつとも夢中な瞬間に客観世界との接触を与える。

解放された社会は、それが解放されており、均衡をとることができ、故に、工業技術をまさにその通りには否定することを欲しないだろう、と私は信ずる。それは機械を芸術家的技能に同化することをよく欲するかも知れない。このことによって、私は、機械が労苦を生産過程から除去し、その芸術的完成を人間に残しておくだろう、ということの意味している。機械は、事実上、人間の創造性に共にあずかるだろう。生産品、特に個人的使用に供される生産品の仕上げは共同体に残されるが故に、自動的な、サイバネ化された機械が用いられ得ない理由は何かもない。機械は原料の採掘、溶解、輸送、成形等に含まれる労苦を吸収し、芸術家的手腕と技能の最後の段階を個人に残して置くことができる。中世の大聖堂を建てている多くの石は、敷いたり、組積みにしたりするのに適させるために注意深く正方形にされたり、標準化された—今では現代的機械によって急速に、労苦なくなされ得る割りの悪い、反復的な、退屈な仕事。一度石のブロックが置場にはめられれば、職人がそれらの外装をつ

力によって広げられる。

（注）警察官僚制の「理想的人間（＝期待される人間像）」は、その内奥の考えが嘘発見器、電子聴取装置、そして「真実」薬等によって侵され得る存在である。政治官僚制の「理想的人間」は、その内奥の生活が突然変異誘発化学物質によって形づくられ、そしてマス・メディアによって社会的に同化され得る存在である。産業官僚制の「理想的人間」は、その内奥の生活が潜在意識的な、そして予言的に信頼させる広告によって侵され得る存在である。軍官僚制の「理想的人間」は、その内奥の生活が集団大虐殺の一律訓練によって侵され得る存在である。

我々は、人間と機械の両方を犠牲にすることなしに、生きた人間を死んだ機械から分離する裂目をいかにして埋め得るか。我々は生存のための工業技術をいかにして生活のための工業技術に転換し得るか。これらの疑問のどれかにでも（オリンピックの神々の如く）堂々とした断言で答えることは馬鹿／＼しいことである。未来の解放された人間は、そのすべてが予見できない工業技術の革新にもとづいているだろうところの非常に多種多様の互に排他的な、あるいは組合せ得る諸労働スタイルから選び出すだろう。それともまた、未来のこれらの人々は工業技術の主要部をまたぐことを単純に選ぶかも知れない。彼等はサイバネ化された機械を工業技術の地下に没め、社会生活、共同体、創造性等からそれを完全に絶縁させるかも知れない。ほとんどが社会から隠されて、機械は人間のために働くだろう。自由共同体は、家庭に物品を運ぶためのかごをつけたサイバネ化された組立て工程の終点に位置しているだろう。工業は自律的な

くった。労苦は創造的人間労働に取って代られたのである。解放された共同体では、工業的機械と職人の道具の組合せは、人間歴史におけるいかなる時期にも比類のない程の巧妙さと創造的相互依存に達し得るだろう。職人的技能への復帰というウィリアム・モリスの展望はその郷愁的なニュアンスから解放されるだろう。我々は技術における質的に新しい発展—生活のための工業技術—について真に語り得るだろう。

自然環境と自然資源に対して生命力を与える観点を獲得したなら、自由な、地方分権化された共同体は、「必要」という語に新しい解釈を与えるだろう。マルクスの「必要の領域」は、無限定に拡張される代りに、狭小にされる傾向になるだろう。必要は生活と創造性という高い価値評価によって人間化され、測られるだろう。質と芸術家的手腕は量と規格化への現代の強調に取って代るだろう。耐久性が消耗性への現代の強調に取って代るだろう。伝統感、過去の世代的個性や芸術家的手腕等に対する驚嘆感によって清められた貴重品の経済が、心のこもらない、季節的にはやりすたりのある商品に取って代るだろう。技術的改革は、マス・メディアによって工作された好みの墮落とは区別されるところの人間の自然な性向に対する感受性を伴ってなされるだろう。保存はあらゆる物品における浪費に取って代るだろう。官僚的操作から解放されて、人は一層単純な、ごく／＼した物品の山のない物質生活の美しさを再発見するだろう。衣服、食事、家具類、そして家等は一層芸術的に、一層個性的に、一層層層になるだろう。人は、人間に強制された物品ではなく、人間のためのものである物品感を再発見するだろう。取引きと買ひだめという胸くその悪くなる儀式は、作ることと与えることという感

覺的な行動に取って代られるだろう。物品は、貧困化した自我のための松葉づえであったり、發育不全の個性間の媒介者であったりすることを止めるだろう。物品は多面的で円熟した、創造的諸個人の生産物、そして統合的發展的な諸自己の贈り物となるだろう。

生活のための工業技術は、一共同体を他の共同体と統合するという力強い役割りを演じることができよう。手工業技能の復活、物質的必要の新しい概念等に合致するように規模を改めて、工業技術はまた連合の筋骨として機能するだろう。国家的規模の分業と工業の集中化は、工業技術が人間の規模を超え始めているが故に、危険である。それは益々計り知れないものになり、官僚的操作に役立っている。共同体の制御からの逸脱が真に物質的な条件で（工業技術的に、そして経済的に）起る、という程度にまで、中央集権化した諸制度は人間の生活を支配する真の権力を獲得し、そして抑圧の諸源となる脅威をもつ。生活のための工業技術は共同体に基づいていなければならない。それは共同体と地方的水準に合うように仕立てられねばならない。しかしながら、この水準では、工場と資源の配分は共同体グループ間の連帯を実際に増進することができるだろう。それは共通の精神的な、そして文化的な利益の基礎の上にのみならず、共通の物質的必要の基礎にもそれらを連合するのに役立ち得るだろう。地方の資源と独自性に依存して、合理的な、ヒューマニスティックな平衡が、自給自足、産業連合、そして国家的規模の分業等の間でとられ得るだろう。

社会はあまりにも「複雑」なので、發展した産業文明は生活のための非集中化した工業技術と矛盾しはしないか。この疑問への私の答えは明確な否である。我々の時代の社会的「複雑性」の多くは、

、二の物品を選抜するならば、そしてもし我々が、欠乏、不安定、支配等の強制された状態で社会を維持するために必要とされる貨幣経済、国家権力、クレジットシステム、書類記録の整理保存の仕事、警察等を消滅させるならば、社会は合理的な人間になるのみならず十分に単純にもなるだろう。

私は、たつた一ヤードの高質の電線の背後には、銅鉱山、採掘に必要な機械類、絶縁物質生産設備、銅溶解と形作りの複合設備、電線を分配するための輸送システム——そしてこれらの諸複合設備の背後には、他の諸鉱山、諸製造設備、諸機械工場等々——が横たわっている、ということに軽視したいのではない。十分の銅と他の有益な金属は、将来の世に彼等が必要とする全部を提供するために、我々の現代の社会の破壊物の破片からスクラップとして回収され得るけれども、現存する機械で採取される種類である確かさの高い銅鉱山は、どこにでも発見されるものではない。しかし、銅は、分配の国家的規模のシステムによってのみ供給され得るところの相当大きな部門の金属に入るだろう、ということを確認しよう。どういう意味で、言語の現代的センスでの分業が必要であるか。全く何も必要ではない。最初に、銅は自由な、自律的な諸共同体——それらが銅を採掘する共同体であれ、銅を必要とする共同体であれ——の間に他の物品と伴に分配され得る。この分配システムは中央集権化された官僚的諸制度を必要としない。第二に、そして多分一層意義深いことだが、余るほど十分な銅資源を持った地方にある共同体は、単なる採掘共同体ではないだろう。銅採掘はその共同体が行う多くの経済的諸活動の内の一——層大きな、多面的な、有機的経済領域の一部——であるだろう。同じことは、その氣候が特殊な食料の成育にもつ

資本主義企業の書類記録の整理保存の仕事、管理、操作、そして不
断の浪費等において生じる。プチールはブルジョア的書類とじ込
み整理システム——送り状、会計簿、保険記録、税金書式、そしてど
うしても必要な書類の束等——でいっぱいになった陳列だの列——に畏
敬している。プチールは産業管理者、技術者、財政操作者、型創
り者、市場同意開拓者等の「専門知識」によって呪縛されている。

プチールは国家——警察、法廷、刑務所、連邦の諸局、官房等、つ
まり抑圧、統制、支配等の鼻もちならない、病気の全体——によって
絶体的に心を迷わされている。もし我々がその諸前提——所有、「生
産のための生産」、競争、資本蓄積、搾取、金融、中央集権化、抑
圧、官僚制、人間の人間による支配等——を認めるならば、現代社会
は信じ難く複雑、人間の理解を超えてさえも複雑である。それを実
現する諸制度——官庁、何百万の「職員」、書式、莫大な重さの紙、
机、タイプライター、電話、そして勿論、書類整理保存だの列ま
た列等々——は、これら諸前提のどれか一つに連鎖している。カフカ
の小説におけるように、これらの物は現実ではあるが、社会的風景
上の不思議な夢のような、不確かな影である。経済はそれに対して
一層現実性をもっている、そして精神と感覚によって容易に精通さ
れる、がしかしそれはまた高度に入り組んだものである——もし我々
が、ボタンは千種の形でつくられねばならない、織物は革新と新奇
の幻想を創り出すために種類と型において終しなく変化されねばな
らない、浴室は目もくらまばかりの多種多様の調剤や水洗い薬
で溢れるまで充たされている、台所は無数のばく／＼い器具でこ
た／＼乱雑になっている等のことを認めるならば、もし我々がこの
いやらしいごみくずの中から一層役に立つ種類の高い質を持った一

とも適した共同体、あるいはその資源が全体としての社会にとって
は稀少で、独特の価値を持つものである共同体にとっても適用でき
る。あらゆる共同体は地方的な、あるいは地域的な自給自足にほぼ
近づくだらう。その共同体は、全体性が環境との共生関係に生きる
ところの完全な、多面的で円熟した人間を創るが故に、全体性に達
しようと追求するだろう。たとえもし経済の実質的部分が国家的規
模の分業の領域内に入っていたとしても、社会の全体的な経済のウ
ェイトはなおも共同体にかかるだろう。もし諸共同体のいかなる歪
もないならば、全体としての人類に対する人類のどれか一部の犠牲
は少しもないだろう。

親切、同情、そして相互扶助等の基本感情が人間の行動の核心に
横たわっている。この下卑たブルジョア社会においてさえも、大人
が、その行為が自身の生命を危険に陥れるにもかかわらず、子供
を危険から救うだろう、ということに我々は異常なことだと思っ
ていない。例えば、鉱夫が落盤に会った仲間の労働者を救うために死
を賭すだろう、ということ、あるいは兵士が負傷した味方の兵士
を安全な場所に運ぶために激しい銃撃の下をほふくするだろう、と
いうことを我々は不思議なこととは思わない。我々に衝撃を与えが
ちなものは、扶助が拒絶される場合——例えば、刺されていたり、殺
されかかっている婦人の叫び声が中間階級の近隣では無視される場
合——である。

それでも、この社会には連帯の分子（——基本単位になるもの）を
保証するように思えるものは何もない。我々が連帯であると思うも
のは、社会にもかかわらず、社会のすべての現実に対して存在する
つまり人間固有の親切と社会固有の不親切の間の終ない闘いとして

存在する。もしこの親切が全面的に開花し得、社会が個人の尊敬、

個人の愛さえも受けるに足りたならば、我々は、人間がいかに行動するかを想像できようか。我々はなおも、野蛮な、血ぬられた、下劣な歴史の子孫——人間による人間の支配の最終産物——である。我々はかつて支配のこの状態を終焉させないかも知れない。未来は我々と我々のまやかし物の文明をワグナーの神々の黄昏（『古き神々と世界との滅亡』）において破滅させるかも知れない。すべては何と馬鹿／＼しいことか／＼しかし、我々はまた人間による人間の支配を終焉させるかも知れない。我々は遂に過去への鉄鎖をたち切り、ヒューマニスティックな、アナキズムの社会を獲得することに成功するかも知れない。我々の時代に我々が軽蔑するところのそのまさに規準によって未来の世代の行動を論じることがは、不合理の骨頂、真に無遠慮の極致ではないだろうか。自由な人間はどん欲ではないだろう、ある解放された共同体は、それが銅の潜在的独占を持っていてるが故に、他の共同体を支配しようとしまいだろう、ゴンビューター「専門家」は機械工を奴隷化しようとしまいだろう、そして婚約のしるしに友愛会のピンを与えられた、結核の処女についてのセンチメンタルな小説は書かれないだろう。我々は未来の自由な男や女にたつた一つの事を頼むことができる——非常に長くかかったこと、及びかくまで骨が折れる登りであつたことを我々に許してくれること。プレシユのように、我々は、彼等（『未来の解放された男女』）が我々をあまり厳しく考えないようにすること、彼等が我々を同情し、そして我々が社会的地獄の深淵に生きていた、ということを理解すること等を頼むことができる。

しかしその時、彼等は、我々の彼等への伝言がなくても我々をど

のように考えるべきかを確実に知るだろう。

ニューヨーク

一九六五年五月